

らい 来ぶらり 37

アルペールビルオリンピックでのスピードスケート500mで黒岩敏幸選手が銀メダルを取りました。そして新聞には同選手が夏の間筋力トレーニングに励んだ際のコーチが号泣しながらリンクを見つめていたと報じられていました。おそらく、このコーチは選手と同じくらいに全知全能を傾けてトレーニングを指導し、まさに自分の分身がスケートをしているような気持ちでいたのでしょう。このような背景は容易に想像できるので、ハイライトを浴びている選手だけでなく、その周辺に起こる諸々の汗と涙の物語を描くスポーツの記事を読んで多くの人が感動を覚えます。しかし、勉学の面でスポーツ選手の努力に負けず劣らず、というよりもむしろもっとはるかに努力をしている人がたくさんいるのに、どうもこちらの方はなかなか世間の耳目を集めにくいようです。

数学科4年の田中仁君はうっすらと光を感じるという程度の視力ですが、成績は抜群の人です。それもそのはず、彼が点字を読むスピードは私が本を読むのとほとんど同じで、数学の複雑な記号や式等も難なく読んでしまいます。このようになるまで、彼の努力や何人もの人たちの協力がどれほどのものであったのか、きっと私たちの想像以上のものでしょう。更に学習院大学においては数学科の飯高茂教授がワープロで点字に

あなたが主演

図書館長 片瀬
(理学部教授 微分位相幾何学)



翻訳するソフトを作り出され、何人もの数学科の学生がボランティアとしてワープロに向い、数学の本の点訳に協力しました。その結果は彼が数学を十分に勉強でき、素晴らしい成績をあげるといって形になって表れているのです。これは他人には一見して分かるものではないけれど、金メダルものの汗と涙の感動ドラマです。程度の差こそあれ、学内にはこのようなドラマが沢山あることでしょう。

さて、中央図書館は勉学の面でみんなが地味ではあるが、こういうドラマの主演となれるよう、いつでもお手伝い出来る態勢にあります。すなわち、単に本が用意してあるだけでなく、諸々のレファレンス・サービスが充実しています。現在調べたい本等があるなら、すぐ図書館のカウンターに来て相談してはいかがですか？“まだ文献検索をする程では”と知っている人は『学生生活の手引』の大学図書館の項を読んで下さい。いつかきっと役にたつ時がくる……いや、すぐ研究を進めたくなるでしょう。“図書館なんて……”と思っている人。まあ一度待ち合わせ場所に大学図書館のロビーを使ってみては？ちょっとシャレしていますよ。そして知識の‘棺桶’ならぬ宝庫の扉を開き始めませんか！

片瀬先生は本年4月1日から大学図書館長に就任されました。



この『イン・アンド・アウト』（リー・タロック著 新潮社刊）は、服飾を一つの文化として捕えるための示唆に富んでいる。文中に登場するラベルは全て実在しているもので、やみくもに列挙されている

のではなく、ある基準に基づいて選択されている。著者は西洋という洋服を着ることが通常である社会に属しながらも、服飾について歴史的な見方をしていない。文中の最も古いラベルはマリアノ・フォルチュニーである。このようなラベルの選択からも考えられる著者の基準は、「独創性と時代性が感じられるクリエイション」ということになろうか。そうしてみるとバーバリーが「アウト」になるのもうなずける。このようにこの「ファッションとイメージの小説」はフィクションの域にとどまらない、服飾文化の好テキストとなっている。（哲学科卒 入江真介）

私が経営学科へ入学した頃、経営に関する知識が乏しかったためなかなか経営学になじめませんでした。そこで、新入生の皆さんに読んでもらいたい本として『尊敬おく能わざる企業』（内橋克人著



光文社刊）を紹介します。この本では、日本企業は企業環境が急変している現在において、企業行動倫理基準を定め、その範囲の中でフェアな競争を心がけなければならないといった、これからの日本企業のあり方について述べられています。気軽に読める本なので、経営学科以外の皆さんも読んでみて下さい。次に、私が大学生時代に読んだ本の中で印象に残ったのは『音楽』（三島由紀夫著）です。精神分析によってなどを暴き出していく推理小説のようで、また、三島由紀夫ならではの唯美的な世界が描かれています。一読をおすすめします。（経営学科卒 澤田晴美）



新入生に贈る 私のおすすめ本



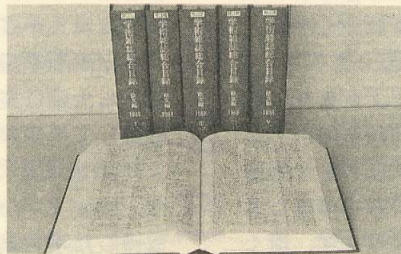
大学図書館で最後に借りて読んだのは、スペイン市民戦争(1936～1939年)を扱ったこの『カタロニア讃歌』だった。著者であるイギリスの小説家ジョージ・オーウェル自身が、義勇兵として1936年12月から翌6月にスペインを脱出するまでの間、実際にバルセロナを中心とするカタロニア地方周辺の戦闘に参加した時の体験をつづっている。「現代の全体主義国家に必要な、呪うべき一枚岩の能率のよさは、スペイン人のもたないものである」私が気に入った文句だ。血生臭い戦闘や党派間の争いの様子とは対照的だが、オーウェルの現代文明批判の原点だったのかも。著者自身認めているように、『カタロニア讃歌』だけではスペイン市民戦争を理解することはできないが、ある一つの姿は見出せるだろう。折しも今年にはバルセロナ・オリンピックの年だ。（政治学科卒 和田洋子）

大学に入ってまず面食らうのは、授業で使う参考書ではないでしょうか。高校で使う参考書は、かゆいところ、手に届くくらい親切に書かれているのに対し、大学の参考書は読み手よりも論理性の方を重視するので、どうしても取り付きにくくなっています。また、内容にしても、計算技術のほかに、その計算を支える仕組みや理論に重点が置かれるので、定理や証明を理解することが必要になってきます。こうした定理を理解するには、試行錯誤を繰り返しながら自分なりにイメージを作ることがとても大切です。このイメージ作りに役立つ本として私は、志賀浩二著の『数学30講シリーズ』（朝倉書店刊）をおすすめします。この本には、多くの参考書にみられる堅さがなくて、とても読み易く、基本的な考え方を習得することができます。（数学科4年 山内伸二）

図書館の仕事の中に資料の収集というのがあります。理想を言えば全ての資料が集められれば良いのですが、実際には予算、スペース等の問題でそうもいきません。そこで図書館の間には“資料の相互利用”というシステムがあり、雑誌についてはこの『学術雑誌総合目録』が役に立ちます。

これは昭和28年に文部省が学術情報の流れを良くするために編集し、刊行した『学術雑誌総合目録自然科学欧文編』が始まりで、以後この事業は東京大学情報図書館学研究センター、同大学文献情報センターを経て、現在の学術情報センターに引き継がれています。そしてこれまでに数回の統合改訂が重ねられて、今では『学術雑誌総合目録和文編1985年版』が3分冊、『同欧文編1988年版』が5分冊刊行されています。(なお和文編については今年の春に最新版が刊行予定です。)

『学術雑誌総合目録』



収録されている対象機関は、国公立大学、各種研究所等600余りで、和文編が約98万件、欧文編が約83万件の所蔵データ件数をそれぞれ持っています。

使い方は簡単で、雑誌のタイトルさえ分かれば引けるようになっています。例えば『中央公論』の第25巻が見たいというとき、

まず学習院の目録を引いてみると『中央公論』は所蔵しているが、必要な第25巻がない事が分かります。そこで和文編で『中央公論』を引くと、慶應義塾大学三田情報センターで第25巻を所蔵している事が確認できます。

学術情報センターではオンラインによる目録所在情報サービスも行っていますが、この冊子体目録の需要も根強く、今後も改訂を続けていくようです。

新入生の皆さん、図書館に『Hanako』や『JJ』がないのがっかりしないで下さい。この目録がきっと必要になる時が来ます。大いに活用しましょう。(雑誌係 北村 誠)

外国雑誌がMainです!

物理・化学図書室

南4号館1階に位置しているのが、物理・化学図書室です。現在200種余りの専門雑誌と約13,000冊の単行本を所蔵しています。全て開架で誰でも本を手にとって自由に閲覧できます。とはいえ、普段の利用者はほとんどが先生方、助手の方、院生の静かな図書室です。

理系では雑誌が重要であるため、当室でも特に外国雑誌の割合が蔵書構成上50%近くを占めています。新着雑誌に眼を通したり、ゼ

ミや学会で発表する論文の資料をコピーしたり、利用の中心もやはり外国雑誌です。「もっと雑誌の充実を」の声も多々ありますが、何せ理系の出版物は高くて高くて……。資料購入費の内、70%余りを外国雑誌代が占めています。おまけに、年々空き書架を埋めていく膨大な量、天井知らずに高くなる価格、外国雑誌サマサマといったところです。まさに物理・化学図書室の主役です。

最先端の研究を支えるには、まだまだ貧弱な資料、乏しいスペース、手付かずの機械化など、発展途上の図書室ですが、将来への十分な可能性を秘めています。

(物理・化学図書室 水津みはる)

大学図書館で珍しく、絵本『はじめてのやまのぼり』(至光社 1991年刊)を購入しました。著者は皇后陛下。武田和子さんの絵とあいまって、やさしい雰囲気にあふれています。学術書に疲れた時、こんな1冊でホッとするのも、時にはいいかも知れませんね。(請求記号 725.8-23)

参考室あれこれ

最近の大学図書館の周辺では、相互協力が活発に行われるようになりました。中でも、図書の貸し借りが盛んになってきました。これは、情報のデータベース化が進みよその図書館や大学の所蔵情報が早くしかも簡単にわかるようになった事にもよりますが、資料の共有化という面からも、貴重な資料を有効に活用できるのは喜ばしい事といえます。学習院大学図書館でも昨年、「国立国会図書館から図書を借りて下さい」との依頼がかなりありました。たまたま利用者の希望している1946-1949年頃のアメリカ國務省の委員会 Report を、多く所蔵している事もあって、利用の数を伸ばしました。その他に成蹊大学や武蔵大学、遠く大阪大学、京都大学等を含め総数では100件を越えるようになりました。

『Frankfurter Neue Presse』『Mannheimer Morgen』『Süddeutsche Zeitung』『Frankfurter Rundschau』各新聞の何れも1966年6月11日の記事を探した時は、国内では探しきれず結局ドイツに依頼しました。国立国会図書館、東京大学新聞研究所等かなり新聞を所蔵していますが、残念ながらこの時期のは持っていませんでした。邦文の雑誌でも昭和2年4月発行の『創画』は見つかりませんでした。戦争前後のものや同人誌の類の資料入手はなかなか困難です。しかし『多田画廊季報』を探した時は、画廊の名簿から大阪に実在する事がわかり、資料は散逸して手元にないという返事でしたが、入手出来る場所を教えてくださいました。今、Nice と Provence で1947年と1962年に取得した学位論文を探しています。こちらは、当該地の大学へ依頼してみる予定です。(参考係 甲斐静子)

お知らせ

資料紹介展

図書館の書庫や学内の図書室・研究室にある貴重な図書や興味深い資料を、図書館1階ロビーで展示しています。昨年1年間の展示内容を以下に紹介します。今年はどうな資料に出会えるでしょう。お楽しみに！

- 第104回 本学教員の著作から：1990年刊行の単行書
- 第105回 ガウディ
- 第106回 Colleges & Universities：今から100年前の欧米の大学教育
- 第107回 モーツァルト 200
- 第108回 良寛讃
- 第109回 蔵書印：学習院大学図書館所蔵

❖ 毎回説明のパンフレットを作成しています。第1回からの全てのパンフレットは綴じて陳列ケース上に置いてあります。いちど目を通して下さい。

開架図書室案内

○雑誌コーナー

朝日ジャーナル、キネマ旬報、エコノミスト、Swing Journal、Time、ユリイカ…。一番利用されるのは、Newsweek 日本語版です。

○指定図書コーナー

一般教育担当の先生方が担当授業の参考書として指定した本を集めたコーナーです。

○新書コーナー

岩波新書、クセジュ文庫、ブルーバックス、中公新書、有斐閣新書がそろっています。ブルーバックスで科学に強くなろう！

○ベストセラーズコーナー

三毛猫ホームズシリーズの人気は相変わらずです。『もものかんづめ』『大地の子』が最近の貸出ベスト2。



来ぶらり No.37 1992年4月1日発行

発行責任者：片瀬 潔 編集委員：石田京子 広瀬淳子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221